

「ちょっと危ういグループ」 のインド歩き

BE GOOD
DO GOOD



日程： 1996年4月28日～5月5日
 グループ： 「ちょっと危ういグループ」という名のグループ
 メンバー： Kazue, UCHIDA (内田和恵, 通称「かず」)
 Hikahu, OKAHARA (岡原ひかる, 「ひかる」)
 Kazue, KAMURA (嘉村和恵, 「かっちゃん」)
 Hiromi, SAKATA (坂田広美, 「ひろ」)
 Shiho, TORIKAWA (西川志保, 「とり」)
 Mitsue, MATSUOKA (松岡満枝, 「みつえ」)
 Toshiko, YAMADA (山田穂子, 「としこ」)
 Hiroshi, YAMANE (山根 寛, 「せんせい」)
 Michiko, YOSHIHARA (吉原路子, 「よし」)

「ちょっと危ういグループ」のインド歩き

1997年3月3日桃の節句 初版発行
 著者 山根 寛
 発行者 ちょっと危ういグループ
 発行所 京都市伏見区桃山町養斉1-1-501
 印刷 yamane print

ちょっと危ういグループ書房

「今度はインドに行くこう」「木村センセに会いたいね」

一九九五年春のことだった。同窓会の話がそのままですんで、よしとかつちゃんか世話人になり、翌年、本当にインドに行くことになった。木村センセは大学を退職し、インドでご主人のカシナータさんとヨーガの同僚を開いている。

「五月のインドは夏だから、脱水症状に気をつけて」

「辛い食べ物に慣れておいて」

木村センセのアドバイスだと、よしやかつちゃんから伝言が入る。

どう気をつけて、どう慣ればいいのかわからない。でも、なんだかこのアドバイスを聞いて、本当にインドに行くのだと思ってしまう不思議さがインドだ。僕はさっそく正露丸を買って、すっかり用意ができた気分になった。

正露丸の効き目はすごい。買うだけでインドに行ける気になる。チェンマイの山奥も、西安もマカオも正露丸だった。インドがちよつと違うのは蚊取り線香が加わったことだ。

一行九人全員が初めて出会うのは、出発当日の関空ロビー。本当に大丈夫だろうかという思いが頭をかすめた。それも一瞬。かつちゃんかびざや切符の手配をし、よしがインドの木村センセに電話をし、計画は実行へと進む。

手にしたのは格安切符とビザだけ、後はその場まかせ。ちよつと危うそうだけど、なんとかなるさ。行き先はインド。

さあー出発(四月二八日)

「いいな」「いいな」

羨望から少しずつ妬みが変わりはじめる家族の声。さりげなさを装って聞き流しながら、しっかりと正露丸と蚊取り線香二箱をリュックの底に入れる。

第一集合地点の天王寺駅、ひろがボーイフレンドの下田君に見送ってもらっている。よしとひかるも到着。としこが来るかもしれないというよしの情報があり、駅の構内を交代で探す。

時間になってもとしこは来ない。このときすでに、危うい旅は始まっていた。

「としこ、関空に来るよね。行くこうか」

よしは自分に言い聞かせるように僕たちに言いながら、関空特急に乗り込む。

フライトは午後二時の予定。一二時過ぎにみんながそろった。チェックを終えて食事。エア・インディアのジャンボに乗り込み、サリー姿のステewardessを見ても、まだ本当にインドに行くという実感がわからない。「えーっ、やだー私も買って来た」

「うっそーっ、わたしも」

と、みんな「地球の……」をもっているのがすごい。

飛び立ってすぐに飲み物サービスと機内食がでる。昼御飯を食べるんじゃないかと誰かが言う。サーモン、バターライス、ヨーグルト、洋梨のチョコレートかけ、コーヒー。食事が終わってしばらくして、後部座席方面がずいぶんにぎやかになる。

覗いてみると、アジアのおじさん達が口論をしている。次第に熱を帯び、ついに手を出して取っ組み合い。すごい。最近僕たちはこんなに本気で身体をはる喧嘩をしなくなったので、思わず感動してしまう（負けるな、ジャブ。痛そう）。

香港で一時間半、乗務員の乗り換えとかなりの乗客の乗り換えがあり、インドに帰る人が増える。機内の風景が急にインドになる。香港を出発するとまた機内食。子羊のカシューナッツ入りカレー煮、ナプランピラフ、ヨーグルト、ピクルス、コーヒー、ビール。ピクルスは激辛、頭がチクチクする。

インド時間の夜九時にデリー到着。ルピーに両替（一ドルが三三。三六ルピー）をすませて、政府観光局（ETDC）をさがす。とにかく泊まる場所を確保しなければ。

一人三〇〇ルピー以下のホテルを紹介してほしいと頼むと、一室八五〇ルピーを四部屋なら全部で三千ルピーにするというホテルを見つけてくれる。一人はエキストラベットで我慢するのが条件だ。まあいいか。

タクシーは一台二二〇ルピーで三台頼む。クラクシオンをうるさいほどならして、ゴーカードのように深夜の道をビュンビュン突っ走るタクシー。バックミラーはとれたまま、スピードメーターはピクリともしない。ハンドルの横にヒンドウの神のシール。交通安全、安産、商売繁盛、縁結び、インドの神さんも何でもありなのだろうか。

ちよっとスリルがあつていいが、

「前を見て運転しろ」

と、何度か口に出かかる。

ついたホテルの名前がすごい。ロイヤルパレスホテル。思わずロイヤルパレスってどこだろうと探しそうになる名前と実物のギャップ。

「ここ、いいホテル。日本人泊まった」

インド英語でマネージャー氏は自分が一緒に移った日本人中年女性の写真を見せる。明日の予約を取ろうといつまでもうろろしているタクシーの運転手を残して部屋に入る。

予約したはずのエキストラベットが用意していない。頼むと、大きなボンボンベットをおじさんが持ってくるが、チップを要求して部屋を出ない。五ルピー出しても受け取らない。こんな時のおみやげにと持ってきたライターもいらないう。お釣りははらうからもっと大きなお金をと要求する（インドも変わりつつある）。何というしたたかなインドのおじさん。深夜で疲れているため、根負けしてしまう。

電力事情が悪いのか、何度も電圧が下がる。電気が消え、真っ暗な中で懐中電灯を使って水シャワー。窓を開けると月明かりの中で白い野良牛が、頭、ホテルの前にたむろして、何やら密談をしている。

「ンモ：ンモ：ンモ：」、「ンモ：ンモ」。

「夜更かしするなよ」

不良牛に注意するが「ンモッ」と一声で無視。

深夜になって、明日は月曜なのでタージ・マハルは休み、このホテルでゆっくり泊まってデリー見物をしろとホテルのマネージャーが言う。バスセンターも休みだという（本当は嘘だった）。アーグラ行きはどうしよう、デリーですごすか、リシケーシユに行くか。
ここはもうインド、ともかく寝てからにしよう。

走るサウナ（四月二十九日）

翌朝早く、タージ・マハル見物から予定変更、リシ・ケーシユに行くことにする。2泊の客だと思った当てが外れたマネージャー氏。

「私に：できることありませんか」

「今日デリー：明日タージ・マハル：それいい」

妖しいインド英語でいろいろすすめる。

そのうちHEDDの無料バスだというマイクロバスが来る。

「HEDDのセンターに案内するよ。お金いらないう：フリーね。リシ・ケーシユに行くバス、他の観光ツアー紹介するよ。フリーね」

繰り返されるフリーが気になる（ただどこかいものはない。マネージャーと組んでいるらしいことが後でわかる）。

チェックアウトの時、請求されたホテル代は昨日紹介された時の料金とずいぶん違う。あれこれ言い合って三九六〇ルピーで手を打つ。一度もつながらなかったリシケーシユへの電話代も一九〇ルピー別に請求される。

「一度もつながらなかったのに、インドの電話代は高い」

「コンピュータにコネクトしたよ、そのお金」

なんだかわからないけど、しかたのない人たちだ。これが日印民間的福祉財団事業の始まりの洗礼であった。

バスが着いたのはデリー駅の近くのはずだが、なんだかいかかわしそうな路地裏に入り込む。ここが事務所と言われたところは、机一つの小さな部屋。

「デリーからリシケーシユ行く。リシケーシユからデリーもどつてアーグラ行く。アーグラから空港行く。一人八〇ドル」（一人二七〇〇ルピー、ぼったくり）

何人もの暇そうなお兄さんやおじさんたちがニコニコしながら勧める。早口のインド英語に思わず頷かされてしまいそうな感じだ。

もうカモにされはじめている。ここは負けてはいけない。よしにやめようと目で合図する。よしもそれがいいと目で訴えている。悠然と断って部屋を出る。あてもないまま、ともかく汽車の時間をとデリー駅を探して歩き始める。あの手この手で、お兄さんが誘いをかけながらついてくるのを振り切つて駅を目指す。

早朝のデリー、リュックを背負った八人の日本娘と中年のおじさん一行が歩く。カモがネギを背負つて、これほどびつたりのご一行様はない。

やつと駅に着くと、リシケーシユ行きは午後二時、まだ五、六時間ある。思案顔が眼にとまったのか、バスがあるよとおじさんがインド英語で話しかけてきた。

「気をつけなよ。この辺は悪い案内人がたくさんいる。私大丈夫、もぐりじゃない」

政府の許可を得た案内人だとバッジを見せる。ほんとかな、まあ行ってみるか。今までの人より目つきが信じられそう。怪しかったらまた逃げれば良いとついていく。

「デラックスバスあります、安いのもあります」

どれも路線バスよりは高い。安い、高いと交渉していると、夜行バスなら二〇〇ルピーだが夜九時半出発、それまで、デリー観光をと勧められる。

インドのおじさん達は、みんな商売上手でうれしくなる。娘たちはそれぞれ心配そうな顔。そうだ、この手で行こう。

「この娘たちは学生で、リシケーシユの友達のところに行く。余分なお金を持っていない」

と、話してみる（そのときから「ちよつと危ういグルーブ」は先生に引率された学生に変身したのだ）。

「ミニバスがいい、一人三〇〇ルピーで直接リシケーシユまで行く、五時間」

デリーで時間をつぶすより、早くリシケーシユにつく方がいい。決まったらとたんに、コーラのサービス。思わずインドではジュースに睡眠薬を入れて勧め、眠らせて荷物をとることがあるので注意するようにという話を思い出す。目配せして二、三人は飲まずに、様子をみる（疑ってごめんなさい、ほんとにコーラだった）。

ミニバスの運転手が行きつけの露店に立ち寄り、チャパティーで朝食をとる。一食五ルピー日本円で一六円のホットな味に感激する。朝食を済ませてバスに戻ると、助手席に若い男の子が一人増えている。何者とも、運転手も本人も説明しない。便乗かな、まあいいか。

ざらざら太陽が照りつけるでこぼこ道を、ミニバスが走る。路線バスに次々追い越される内に、ついにバスの中は走るサウナに変わる。バスも人間も水を補給しながら、熱射と土ぼこりの中を走る、ただひたすら走る。

「うまいぞ、食べて見ろ」
 朝食は、運転手が立ち寄った露店でチャパティーにする。

手まねで勧めてくれた運転手のチャパティー代は、一人増えた若い男の子の分も含めて、きちんと僕の支払いに入っていた。なかなかやるもんだね。

どんどんすぎてゆく時間、五時間すぎても予定の三分の二。出発して八時間、夕方五時になって、やっとリシケーシユの文字が道ばたの看板に見られるようになる。カシナータさんの住所と簡単な地図も見せたのだが、運転手のお兄さんは、道が分からないようだった。

あつちで聞き、こつちで聞く。そのうち大人や子供が次々集まってくる。

「あんた知ってる」

「カシナータ知らない」

「聞いたことある気する」

らしいことを言っているヒンズー後が飛び交い、道ばた談義が始まる。その内、一人のおばさんがそばの男の子に川の方を指さして何かいう言う。

その男の子が手招きしながら、小走りに路地裏を抜ける。ついていくとガンガアの河岸に建てられた瀟洒な白い家までつれていってくれた。デリーでの出来事もあったのでチップを渡そうとすると、男の子はとんでもないというように手を振って受け取らず、はにかみながら去っていった。リシケーシユで会ったインドのさわやかさにうれしくなった。

ベルを鳴らすとカシナータさんが扉越しに顔を出し、「あれー、こんにちわ」（日本語）。ほんとうにカシナータさんと木村センセとガンガーだ。懐かしい再会に皆おはしやぎ。

「キヤー、キヤー、ワー」

木村センセも部屋中走り回る。予定変更の説明も楽しい。一日早くついたが、ホテルもその日から泊まれることになる。このホテルが今回の旅行で一番上等だった。

チェックインをすませてカシナータ家へ。夕食は近所の露店で買った野菜で作った豆ご飯とカレー。ここは肉や酒を売らないベジタリアンの街なのだが、久しぶりの再会を祝して日本から持ってきた酒で乾杯。カシナータ家のヒマラヤ犬のタローもベジタリアンだった。

ヨーガの街リシケーシュ(四月二〇日)

朝六時、静かにガンガーの夜が明ける。山の尾根に朝日が姿を見せはじめると、静かな白い大きな河が少しずつ黄金色に輝きはじめる。日の出を見ながら、ホテルの下の河岸へ降りると、二人の姉妹と一人の小さな男の子が、ガンガーで口をすすぎ、顔を洗っていた。

「ハロー、ハロー」

恥ずかしそうな小さな声。

水遊びの後、二人の姉妹は白いブラウスとえんじのスカートに着替えて、学校に行く用意をする。いいなガンガーが風呂と洗面台のかわりだなんて。

トースト、フルーツジュース、コーヒー、コンチネンタルスタイルの朝食。九時過ぎ、オートリクシヤに総勢一〇人が乗り込み(ぶらさがり)、木村センセの案内で街へでる。小さな静かな街だ。リシケーシュはヒンドゥーの聖地で寺院も多く、デリーとはずいぶん趣が違う。一〇人も乗り込んだせいでオートリクシヤが坂道であえぐ。運転手が、乗り過ぎで最後の一登りがのぼれないというので、降りて歩く。

「私が最初にカシナータにあったのはここ」

「彼、そのとき修行中だったの」

カシナータさんと木村センセの出会いのアーシユラム

「BE GOOD」「DO GOOD」

何も飾りのない言葉がずっと入ってくる。

吊り橋を渡り対岸へ。吊り橋の上では子供たちが魚の餌を売っている。きれいな瞳につられるように、一ルピー払って餌を買う。橋の上からまいてみるが、魚はみえない。大きな魚がいると、餌売りの子供が手を広げてみせる。豆粒大の魚の餌は、かじってみたらトウモロコシの粉のような味がした。

ガート(沐浴場)で沐浴をしている人もいる。各地から訪れる巡礼者用に店もあり、布地やサリー、宝石類を売っている。

昼食はスペシャルタリー。七、八種類のカレーとチャパティー、アイスクリームで合計四五ルピーは、納得の値段だ。

レストランはやたらボーイの人数が多い。まるで仕事の数だけいるようだ。ドアを開ける者、テーブルを拭

く者、水をつぐ者、料理を運ぶ者、みんな一つの仕事しかない、暇でも他の仕事は手伝わない主義のようにみえる。最初は変に思ったが、日が経つにつれこれがインド式生活の知恵なのかと思うようになる。たくさんの人が、それぞれ仕事を分かち合う。手伝わないのは人の仕事を奪わないことなのだ。きつとそうに違いない。

ジュエリーを扱う店で、イヤリングの好きなが、透明感のある乳白色のきれいなイヤリングを買う。なかなかいい。

買い物と見物をゆっくり楽しんで、帰りは渡し船で戻る。五ルピー。ひかるがインドの人にインド人みたいだと言われている。ひかるの彫りの深い二重瞼の顔立ちはこの旅の間に何度かインド人みたいと言われる。

渡し船を下りたところで、プリントのスカーフを売っていた。あれこれみんなが買っているうちに、よし、が支払いの済んだはずのお金を請求される。店のお兄さんと払った、払っていないの言い合いになる。途中で変なおじさんが割り込んできて仲裁を始める。何か言いながら、そのおじさん、店員の持っているお金を自分のポケットに入れて、なにやら理屈をつけはじめ（そのお金あんた野じゃないだろ）。

日本円で何十円かだが、みんな一生懸命。まるでゲームを楽しんでいるかのようなうた。

沿道に並ぶ店で野菜や果物を買って帰る。マンゴーが五個で二七ルピー。日本では信じられないほどの安さだ。ひかるとみづえが今日買ったばかりのサリーを着て、木村邸に夕食に向かう。二人ともよく似合う（ひかるが夕食の時、新しいサリーに食べこぼしでしみをつけてしまったことは内緒）。

夕食はインドのうどんを日本風の出汁でつけ麺風に食べる。デザートはマンゴーがおいしい。とりがちよつと体調を崩している。

「インドでかかった病気がインドの薬がいい」

木村センセのすすめでインドの診療所に行く。わかるような気がする。

夕方より強くなった雨間じりの風。時々電気が消える。風で揺れ裸電線が接触するせいとのこと。タローのガイドでホテルに帰ってからも何度か電気が消え、雨が激しく窓を打つ。ひびの入った窓から聞こえる風の音に、誰かが、こわくて眠れないといていた。昔少年の僕はこんな夜は昔からワクワクしてしまう。

「のんびり川下りもいいわよ」

木村センセの紹介で、明日はラフティング。晴れることを願って、ベッドの中で風雨の音を聞きながら眠る。

とこ宙を舞うラフティング（五月一日）

ガンガー、二日目の夜明け。夜半まで降った雨は止み、ガンガーは今日も静かに輝いている。風が少し強いが、河岸におり沐浴をする。氷河がとけて流れるガンガーの水は冷たく気持ちがいい。昨日の子供をまねてちよつと泳いでみる。

若い夫婦がガンガーの水をくみ、昇る朝日にむかってお祈りをしている。

「せんせいが泳ぐのなら、絶対私も泳ぎたい、朝六時ね」（泳ぐのではない沐浴だ）

「起こしてくださいね」

と、昨晩目をクリクリさせて眠ったとしこは起こしても起きてこない。

昨日街で買ったマンゴーとミカンで朝食をすませ、九時過ぎ、迎えのジープとインド国産のアンバサダーに

分乗する。ラフティングのスタート地点までドライブ。

上流では、もうゴム筏の準備が始まっていた。みんなでゴム筏を河に降ろす。四人にオールが持たされる。オールを持つて足をボートの固定器具にひっかけるように言われる。全員ライフジャケットとヘルメットをつける。

「ンッ！」

のんびり川下りにしては、なんだかワクワクしてしまうような出で立ちではないか。

「私も初めてなのよー、知らなかったわよ。こんなの」

木村センセが突然言う。見たのはガートのある緩やかな流れを下るボートらしい。

三人のラフティングスタッフが乗り込む。バック、フォア、ハード、スローなどの指示通りにオールをこぐように、落ちてもあるなど注意が始まる。のんびり川下りなのに、ちよつと大げさに脅しているんだなど、遊園地のコースター気分でみんな聞いている。

「最初の流れはグッドモーニングという名前だ、目が覚めるよ」

言われたとたんに、ボートは木くずのように激しいピッチングとローリングに見舞われる。

「わーっ、きやーっ」

の声もゴーゴーという水音に消えてしまう。すばらしい目覚ましだ。一瞬にして、ライフジャケットとヘルメットが現実味を帯びる。

「ハードバック」

リーダーの声にみんなのオールが動く。初めてのこぎ手達のオールは宙を切ったり、反対に漕いでいたりですでにパニック。一つ激流を抜けるとしばらく落ち着いた流れがあり、周りの自然を眺めながら下る。

途中から、ひかるは、ボートのバランスをとるウエイトの役割をするように命じられた。バイキングの船についている船首の女神像のように、ボートから身を乗り出し、身体を固定する。彼女の人生の中で、人から指示されたことをこれほど忠実に実行したことが今までにあっただろうか。しかも頭から水をかむるその役目に、コンタクトレンズをしたままだったと後で聞かされた。後ろから見るとそのけなげな姿に、胃袋が笑いをこらえて痙攣する。

ボデイサーフィン、ゴルフコースと次々名前の付けられた急流が続き、一番激しいと言われた激流に入る。オールどころか落ちないようにロープにしがみついているのが精一杯。

九〇度は傾いたのではと思うほどの大きな揺れがあったときだ。映画のコマ送りのように、人が飛んでいる姿が一瞬見えた。ロデオのように荒れるボートの中、誰だかわからない。とにかくしがみついているのがやっと。大きな揺れがおさまる。ボートの中を確認できる程度になったとき、船首の女神は石像のようにこわばったまま張りついていた。顔が固まっている。後部席で二人ほど姿が消えている。ひろが一人地面にたたきつけられたカエルのようにボートの床にはいつくばっている。後一人は？

「としこがあそこにいるーっ」

ボートの左手の流れの中で、逆巻く波に浮き沈みしているととしこを誰かが見つけた。さっき飛んだのはとしこだったのか。

「としこーっ」

「としこー、だいじようぶ」

誰かが叫ぶ。大丈夫と聞かれてもこの激流の中、どう答えればいいのか。何とむなしい呼びかけだろう。としこのクリクリ目がビー玉のように光り輝いて、波間に見え隠れする。

日本人女性ガンガーの藻屑と消える。残された仲間が口々に「彼女はいい娘だった。でも、あの流れではどうしようもなかった」と、別れを惜しんでいた。地元新聞にそんな談話が載るのだろうか。人間、こういう時でも一瞬の間にいるいるなことを考えるものだ。

ひかるはまだ石像状態。ラフティングスタッフが、としこに叫ぶ。

「あわてるな、大丈夫だ」

「そのまま流される」

急流を抜けて、スタッフがとしこを引き上げる。一瞬、水から引き上げられるとしこがインドカワウソにみえたのは錯覚だろうか。

その後、少し流れが緩やかになってから、ジャンプというスタッフの声にみんなで水中に沈。服を濡らさないようにと乗り込んだのが嘘のようだ。

ホテル下の河岸に到着したのは午後一時一五分。カシナータさんと使用人がにこにこ手を振っている。予定では一二時頃ついて銀行で両替をし、列車の手配をすることになっていたので、ずっと待っていてくださったのだろう。

としこがラフティングスタッフが頭に巻いていたスカーフをほしがる。

「日本製の自分のバンダナと交換してくれと言ってみたら」というと、本当に交換してもらって大喜び。

今日は五月一日、メーデーで銀行は休み、列車はもう空席がないとのこと。エア・インディアの事務所に電話をすると、帰りの飛行機のリコンファームは、直接デリーの事務所に手続きに来るように言われる。予定を急遽変更する。新しい予定は、夜一〇時半発デリー行きの夜行バスでデリーに行き、リコンファームをすませてアーグラへということになる。

新しい予定が決まり、チャパティで空腹がおさまると、急に疲れがでたのか、皆お昼寝タイム。とりは元気を取り戻すが、今度はかつちゃんに疲れがみえる。みつえもかぜも魚河岸の魚のように眠りはじめる。

リシケーシュ最後の日ということを知ってか、夕方、対岸に象とクジャクが姿を見せる。日が落ちると満月に近い月が昇り、ガンガーに白い姿を映す。さざ波に砕ける月の光が神秘的だ。夕食はオクラとグリーンピースのカレー、焼きなす、マンゴー。

夜九時半、二台のオートリクシャーに乗り込んでバスターミナルへ。タローは留守番。カシナータさんがホングのオートバイに乗ってバスセンターまで見送ってくださる。木村センセと使用人は僕たちとオートリクシャーに乗る。月明かりの道を、オートバイで疾走する白い服のカシナータさん。思わず、月光仮面を思い出す。デリーまでのバス代一〇六ルピー。

…

「さよならカシナータさん、ありがとう木村センセ」

明日は再びデリー。何が起きるか。お休み。

デリーには着いたけど(五月二日)

朝、四時過ぎにデリーのバスターミナルに到着する。まだ夜が明けぬターミナルで、タクシーの客引きがうるさくつきまとう。移動は明るくなってからの方が安全だし、こんな時間に市内に入っても何もないので、ターミナルで夜が明けるのを待つことにする。あちこちで数人ずつ輪になって座り込んだり、若い夫婦が一枚の布にくるまって寝ていたりする。僕たちも一カ所に集まって仮眠する。

五時半、始発のバスが動き始め、人の動きも多くなる。ウェットティッシュ三枚で朝の身支度の技。まず、一枚で顔と手を拭き、二枚目で洗髪と足拭き、三枚目で歯磨きをする。

オートリクシャー三台に分乗し、リコンファームのためにコンノートプレイスに行く。エア・インディアの事務所が開くまで公園で休むつもりで園内に入ると、

「ハロー、ハロー」「紅茶あります」

ちよつとあやしい日本語が呼びかける。

夜行バスに疲れていたみんなはほとんど何も考えずに座ってチャイを飲む。熱くて甘くて一息つけたが、一杯七ルピーという。しまった先に値段の交渉をするのを忘れていた。高いじゃないかと言うと、飲む前に高いとは言わなかったからと受け付けない。おまけに地下の市場に洋服の店を開いているので、立ち寄り名刺まてくれる。やるもんだね。

時間つぶしに公園の縁石に座っていると、やってきたのは靴磨き。

「僕ジャグラ、インドの靴磨きチャンピオン」

彼の靴磨きはうまいといった言葉を各国語で書いてもらったノートを見せる。イギリス人、日本人、かなりの人数だ。まずは断ってみるが、一〇ルピーだが五ルピーにまけてくれるという。人の良さそうな話好きのジャグラ君がおもしろいので靴みがきをしてみようことになる。

丁寧に片方磨いたところで、例のノートを取りだし、ジャグラは靴みがきのチャンピオンだと日本語で書いてくれという。ただし、値段は書かないようにと念を押された(ンツ?)。五ルピーで安いし、仕事も丁寧なのでノートに書く。

かかとがへつているが歩きにくいかとジャグラ君。そう言いながら、すばやく革の切れ端をゴム糊で貼り付けてしまう。靴磨きが終わった後で、ニコニコしながら、靴の踵の修理は金持ちなら二五〇ルピーだが、おまえなら一五〇ルピーでいいという。ああ、またやられてしまった。踵の修理を頼んだ覚えはないと言うが、引き下がらない。

「ジャグラ、君はインドのチャンピオン。僕は日本のチャンピオンだ。日本のチャンピオンが君の靴をみがいてやるから五〇ルピーにしるよ」

「だめ、僕、靴ない、これサンダル」

「OK。サンダルをみがいてやるよ」

……

「日本のコインない？」

ついに五〇ルピーとサンダルみがきと小銭一一六円で手がうたれた。

次に来たのはベッカーらしい片足を引きずって歩く年齢不詳のおじさん。

「That shoeshiner is bad。」

「Do you know Katmandu? I came from Katmandu before 1 week。」

足に怪我をして帰れないが、薬をもっていないかと膿んで蠅がとまっているくるぶしの傷をみせる。インソングで消毒すると、

「I wanna buy India medicine。 You are 9。 10Rs。 1 person。 90Rs。 Give me。」

一週間前、カトマンズから初めてデリーにきたにしては英語が比較的話せるし、傷はとも最近のものではない。

公園にいるといる怪しいおもしろい人が、日本のカモめがけて次々と来る。リコンファームも無事終わるが、誰かが木村センセに教わったという両替商がみつからない。

四〇度を超える暑さと疲労のせいで、皆無口になる。ついに両替商探しをあきらめて、ブランチャタイム。アメリカンイクスプレスで両替をすませ、再びオートリクシヤに分乗してバスターミナルに戻る。

ローカルバスは一人七〇ルピーだが七、八時間かかるといふ。バス停には本当に乗れるのだろうかというほど人が並んでいる。ツーリストは九名三六〇〇ルピーで二泊三日、アグラーでの自由行動の移動につきあい、最後の日はデリーの空港まで送る、アグラーでは安全で安いホテルを運転手が紹介するという。

みんなの疲労と今日中にアグラーに行き着くために、再びミニバスの利用を決める。ここで半額支払い、

すべてが契約通り運んだときに、最後に残りを運転手に渡すことにする。今度は大丈夫だろうな。

ここまでくると、日印民間的福祉財団事業のおおらかな気持ちに身についてくる。

暑くて遠いアグラー（五月二日）

やってきたバスは、なんと全体が黄色のかなりくたびれたマイクロバス。コニカの商用車の中古。黄色はコニカのフィルムの宣伝色がそのまま残っているせいだ。それでも全員が座っていけるだけでもうれしいと乗り込む。昼過ぎにバスターミナルを出発し、はじめの内は暑さも忘れて街道の景色を楽しむ。

路線バスに追い抜かれるミニバスは、次第に走るサウナと化す。運転手は英語を話せないため、手振り身振り・英語、日本語、ヒンズー語が入り乱れ、それでも何とかお互いの意思は通じ合っている。

よしのカタコト英語も怪しいインド風になってきて、

「私たち、行く。タージマハル。道、分かる？」

どうも文章より単語の方が通じているようだった。

ひかるはこのサウナ風呂のようなバスの中でパカッと口を開けて寝ている。

ひたすら水を補給しながら走ること四時間あまり、なんだか変だ。車のハンドルがぶれはじめる。路肩に寄せて調べると、左後輪がパンクしている。タイヤは四本とも溝のなくなったツルツルタイヤで、取り替えたスペアタイヤなどは中のチューブが見えている。

「チューブが見えてるぞ」

「インドの車は、これ普通。大丈夫」といったらしいことをヒンズー語でいう。(怪しい)
三〇分も走らない内に、交換したスペアタイヤがパンツと乾いた音を立ててパンクした。修理屋を探して、パンクしたままのろろゴトゴト進む。

あるもんだね、修理屋。

パンクをなおしてもらう間、どこからわいてくるのだろうと思うほど、あちこちから人が集まる。道路工事のおじさん達まで仕事をほっぽりだしてやってくる。どこからきた、どこへ行くと、若い日本の娘八人と中年のおじさんの一行に皆興味津々。

ついにとしこは自転車に乗せてもらって遊びはじめる。あのままさらわれていってインドでお嫁に行くのもとしこらしくていいなど、みな好き勝手なことを言う。使い捨てライターとインドのマツチを交換したり、まだこのときまではみんなゆとりがあった。

やっと二本のタイヤの修理が終わったのが六時半。運転手が神妙な顔でお金がないので修理代を払えという。なぜ払う必要があるのか、ツーリスト側の仕事だろうというが、お金がないの一点張り。まだ行程の三分の一も進んでいないし、陽も落ち始めているので、残金から引くという約束で二一〇ルピーを替わりに払う。

地図から判断すると六〇キロも進んだらどうか、水を求めて止まった露店で、再びパンクしているのに気づく。修理したはずのスペアタイヤの空気も抜けてしまっている。さすがに運転手の表情も硬くなった。僕たちはもうあきれぬのを通り越していた。

運良く露店のそばでタイヤの修理をしている。修理屋は、タイヤを見たときにもうだめだから新しいのしろ、中古タイヤもあると言う。運転手はしきりにお金がないから修理してほしいといっているらしい。修理屋は仕方がないというふう頭に振りながら、古タイヤを切っては穴のあいた場所に詰める。あまりの破損のひどさに修理も時間がかかる。日が暮れて、娘たちも次第に言葉が少なくなった。
再度二本のタイヤを修理するが、残りのタイヤもいつまで持つか心許ない。すでにあたりは真つ暗になる。またお金を払えという運転手に、もう払えないと突っぱねてみると、自分で払っている。(おいつ、お金持っているのか。さつきはお金がないからと払わせたじゃないか)

再び走りをはじめたとき、夜一〇時を過ぎていた。やっとアーグラ―市内の灯が見えた時は一二時をまわっていた。
「どこ行きます」

運転手がどこに行けばいいのかと聞く。そうだね、どこにしようかといえる時間ではない。ツーリストではお前がホテルに連れていってくれと聞いたらと伝える。

「……」

「ここあまりきたことない、分からない」
身振り手振りとしんズー語からはどうもそういつているらしい。(おお、またか)

ともかくタージマハルの近辺で、地図を頼りに探すホテルはすべて閉まっている。車の周りにはミニバイクに乗った客引きがホテルを紹介するときはまといはじめる。

「もうホテルないね」「いくら泊まる」「安いよ」

(ここまで来てまたカモにされてはたまらない)

深夜、一時を回ってもホテルはない。のどがやたら渴いてくる。自分一人ならともかく、未婚の娘八人を無事日本につれて帰らねばという気持ちから、ついにミニバイクのお兄さんのすすめるホテルと交渉することに決める。

ホテルKIM、ターバンを巻いた黒いひげのマネージャー氏、エアコン付ダブルで八〇〇ルピーだという。二泊するから一人二〇〇ルピーにしると交渉し、ダブル五〇〇ルピー、僕のエクストラベットは無料というこ

とで手を打つ。予算よりかなり高いが、ともかく今日は休まなければ。

「やっと泊まる場所の確保ができてほっとすると、ミニバスの運転手がうろうろしている。」

「……僕……どこ寝る？」

いい加減にしろ、どうして君の部屋まで俺達が面倒見なければならんだ、もうあの車には乗らないぞ。運転手に言っても無理だろうとは分かっているが、気持ち止まらない。

「あの車は信用できない。タイヤを替えるか、車を交換するようにボスに電話しろ」

「……どれも無理、明日帰る……お金くれ」

マネージャーにいきさつを話して、ホテルのどこかで朝まで運転手を休ませてくれと頼むと、こうしたことになれているのかすぐOKと返事。

シャワーはあるが、途中で水がでなくなる。アングラーは暑くて遠かったが、頭はもつと熱くなっていた。

解約と新たな契約 (三月五日)

朝起きてみると、最悪、ミニバスの前輪がパンクしている。運転手はこの車をなおして出発するので修理代がほしい、この車がいやなら帰るので残金をくれと言い始める。

「ノー」 (断固断る)

「……デリー。帰る。ガソリンない」

「僕の問題じゃない、君のボスと話せ」 (そうだここでは負けられない)

こういうときは英語のしゃべれない運転手の言うことがなぜかよく分かる。僕の片言英語と運転手のヒンズー語がお互いに譲らない。

ついに、ホテルのマネージャーが仲裁に入り、運転手に帰りのガソリンとパンク修理代三〇〇ルピーを渡すことで、ミニバスの契約を解除。

「乗る前にタイヤを替えるように言わなかったからね」

「インドで契約するときは気をつけないとね」

とマネージャー氏。

「私の親戚タクシーしてる」

「今度はクーラー付きの乗用車で帰るといい」

「故障しない、パンクしない」

「私の奥さん日本人だから信用しても大丈夫」

「乗用車二台で七〇〇〇を五〇〇〇ルピー。アングラーが一番安くて、安全」

日本に留学経験があるというマネージャー氏は、家族のアルバムを見せながら言う。

「ただでガイドもするね。わたしの日本語の勉強になる」

とマネージャー。ありがとうとお礼を言おうとすると、ホテルとアングラー城、タージマハルの送り迎えの間のガイドは無料だが、車代を七〇〇ルピー要求。デリー行きと含めて五七〇〇ルピーだと言う。ブルータスお前もかという気になる。

とにかく明日中にデリーに帰らなければ、日本に帰れない。選挙の期間に引っかかっているため、通常の交通機関では足止めされる可能性もある。初日にデリーで泊まったホテルの近くで、選挙に関連して発砲騒ぎがあり、死傷者がでたというニュースを新聞で見た。

(インドの選挙はエキサイティングなので注意しろと聞いていたが、死人まででるとは)

それでも、口についてでたのは、

「インド人の商売上手にはまいったよ。ガイドはノーサンキュー」

「デリー行きとアングラー城の送り迎えて五〇〇〇にしないのならホテルを替えてもつと安いところを探すよ」

少しあわてたマネージャー氏アングラー城の送り迎えをホテルのサービスですするという。

もうこうなると損をしているのか、得をしているのか分からないが、とにかくインド流に取引をするようになった自分がいることだけは確かだった。

タージマハル・文化は人の差異より生まれる

午前中にアングラー城を訪れ、物売りや丁々発止のやり合いを楽しみながら半日を過ごす。暑さを避け、いったんホテルに帰り休憩。今日ははずの誕生日、ホテルで夕食をかねて誕生日をすることに決める。マネージャーに伝えると、にこにこしてそれならタージマハルの送り迎えをただで言うと。そうこなくっちゃ。

午後四時、タージマハルまで、マネージャーの弟が軽自動車で行って送ってくれる。

「買う気？ 買う気？」 「安い、見るだけ」 「あなた、いくら」 「買う気？」 蟻のように群がる物売り。

ついに究極の撃退法を思いつく。

「I have better one than yours!」

「Do you buy this?」

「Mine is very expensive.」

「You should buy this. 高いよ、買う気？」

みな苦笑しながら手を振って去る。大成功。

金曜日なので、タージマハルは四時半までに入れば無料だという。いいこともあるものだ。みんなで少し得した気分になる。

タージマハルは病的なほどシンメトリーに作られた大理石の建築物だ。よくこれだけのものを作ったものだが、そのために多くの民が苦しんだことも事実だ。人間が作った文化遺産といわれるものの多くは、人間の差

異の存在から生まれている。人に差異がなかったなら、これほどのばかげたものは作られなかっただろう。夕暮れのタージマハルの幻想的な美しさの中で、文化遺産とは何かと考えてしまう。

建物の中に入ると、ひげのおじさんがそばについてきて何か説明をはじめた。

「ガイドはいらない」

「私、ガイドない。フリー、説明するだけ」(ちょっと怖いインドのフリー)

懐中電灯で壁のザクロ石を照らして見せたりしながら、一人で説明をする。

建物を出ると、

「私、ガイドない。だけどもなお礼する」(やっぱりね)

日印民間的福祉財団事業としては一〇ルピーくらいは仕方がない。金曜日だもの。

か・つ・ち・や・ん・と二人で座っていると、ちらちらこちらを見る子供がいる。

「ハイ」

話かけると、はにかみながら近づいてくる。家族でタージマハルを見物にきたという。ヒンズー語と日本語の教え合いをしていると、その子の兄弟や家族も子供につられて話に加わる。

最後はみんなで記念写真。インドにきて、何人の子供達とこんな風に友達になったことか。子供たちの目は、タージマハルの壁に埋められたどのジュエリーよりもきれいに輝いている。日本の子供たちが失った子供らしい目の輝きに出会ったことも、今回の旅の大きな収穫だった。

日焼けするからとスカーフでほおかむりをし、裾の長いスカートをはき、サンダルにソックス、大きな布製のバックをたすき掛けにし、カメラをさげ、水の入ったペットボトルを持ち、日傘をさしているひかる。学生らしい女の子たちがひかるを見て、何かこそ話している。そのうちに一人が意を決したようにさっとひかるに近寄る、その娘がひかると並んだ瞬間に、ほかの娘が写真を撮る。これまでもひかるは何度か被写体にされた。

確かに目立つ。あちこちで、インドの人たちの興味の的になる。本人は威風堂々泰然自若。僕たちも敬意を表して、少し距離を置いて歩くことにした。

夜はか・ずのバスデイパーテイ、インドにきて初めてビールを注文してみんなで乾杯する。明日は早いからとパーティを終わらせた二〇時ころ、

「デリー、明日イレクション。デリー外出禁止、店は三時半まで開かない」「予定変更するか」と、マネージャー氏。

ここで足止めされては飛行機に乗れなくなる。町の外から車でデリーに入るとは可能らしいということを確認、とにかく明日は近づける限りデリー近辺まで行って様子を見ることに決める。

再びデリーに戻る(五月四日)

五時起床。チャイとコーヒーで胃と目を覚ます。六時、約束のアンバサダーが二台到着。一台はガソリン車でもう一台はディーゼル車だ。

分乗して走り始める。これまでのミニバスとは違って、時速八〇キロの順調な走り。これなら一〇時過ぎにはデリーだ。と思つたら、ディーゼル車のエンジンの調子が悪くなり、エンスト。どうやらオーバーヒートしたらしい。(またはや暗雲か?)

修理のために修理屋のあるマトウーラの町に立ち寄ることになる。修理の間、運転手が気を使ってみんなにチャイをおごってくれる。

マトウーラの修理屋は昔子供の頃に見た田舎の鍛冶屋のようだった。鉄を曲げ、ハンマーでたたき、人が道具を使ってなおしているというのがそのまま伝わる。自動車がまた不調になったことも忘れ、修理屋の手仕事に見入ってしまう。

応急修理のため、一時間ごとにエンジン不休めながらの走り。少しスピードは落ちたが、一二時半コンノートブレイスに着く。外出禁止も午前中で解かれたということで、ほっとしてインドで最後の昼食。タンドリーチキンとインドビールがうまい。少し体調を崩している者もいるが、ともかく全員無事ここまで来た。

午後は二時間自由行動にする。みなそれぞれに買い物や散策。僕は確かな紅茶を買い、後は慣れてきたやりとりショッピングでまた怪しそうなアクセサリーを二、三。おなかの調子を崩してエアーインディアのトイレを離れられない約ン名以外は、みな自由行動を楽しんだ。

タクシーで空港へ無事到着。約束した料金を渡すと、運転手が足りないと言い出す。そんなことはない理由を聞くと、さつきタクシーの中で、自分の運転サービスはどうだと聞いたときお前はとても良いと言った、だからサービス料を支払えと主張する。

日本に電話をするが留守のようで通じないが、電話の取り次ぎをした男性が九一七ルピー要求。電話は留守で通じなかったし、一分もかかっていないのに九一七ルピーも払う理由がないともめていると、エアポートオフィスの担当官が来る。

二人ともオフィスに連れて行かれもめ事の理由を聞かれる。最初電話代を払わないこの日本人が悪いと言っていた電話案内の男は、途中から九一。七ルピーと言っただけだと主張を変える。

何かあれば日本に連絡をすることがあるかもしれないが、悪質な稼ぎをする連中がいる。今回は見つけることができて良かったと担当官が言う。

急に制服姿に連れて行かれた僕を見て、理由の分からないまま残されたみんなはびっくりしたらしい。ともあれ、最後の難関を越え、午後七時半、ついに搭乗手続きを終える。ほっと安心。

三〇分遅れて五日早朝、飛行機はデリーを離れる。飛び立つと、すぐに深夜の機内食。日本食だといって出され食事は、グリーンピース、人参などを炊き込んだピラフ風ライス、ジャムドーナツ、ヨーグルト、フルーツ、緑茶、缶ビール。食事が終わるとふっと眠くなった。うとうとする瞼の裏に、ガンガの蕩々とした流れ、幾皿ものカレーが皿に並んだターリー、子供達の吸い込まれそうな黒い瞳がうかぶ。娘たちも疲れと安心のせいか、眠り始めている。ずいぶん長い間一緒に旅してきたような気がした。

帰国 (五月五日)

往きと反対に香港を経由して一二時三五分関空に到着。あつけないほどの通関である。ここはトイレも床も

そのまま横になって眠れるほどにきれいで、誰も物売りに来ない。きれいすぎて、整いすぎて、なんだか自分の居場所のないような違和感を感じる。みんなで記念写真をとって、再会を約束して別れる。
関空特急は一分も遅れることなく運行される。乗り換えの京橋で、なんだか急に食べたくなってラーメンを食べた。インド料金で二〇〇ルピー。ウソツ…。

新しい始まりの章

日本に帰ってしばらくして、すばらしい仲間との旅日記を記録に残そうと書き始めた。

山の稜線の向こうから陽が昇り、にび色の川面が黄金色に輝きはじめるガンガールの朝、氷河がとけて流れる水で沐浴し、日中は焼きつける日差しの中を歩き、夜は空に浮かぶ銀白色の月と川面に映る乳白色の月の光に包まれて過ごした時間。生まれ生きること、病むこと、老いること、死ぬこと、感傷を遙かに超えた人間と自然の営みの中で、あわただしい日常のせいにして少し閉ざしていた身体性を取り戻した旅だった。

夏の終わりに、ちようど掌におさまるガンガールの白い卵のような石が、人の手を介してインドから届いた、カシナータさんと木村センセが選んだ石との伝言であった。その石を手に、最後の稿を終えようとしている。アーシラムの石碑に刻まれた言葉を想い出しながら…。

BE GOOD DO GOOD

追記：「ちようど危ういグループ」の詩

かあ： 初めての海外旅行はいろんなドキドキの連続でした。目で見た景色や肌にはりつく暑さやにおいの記憶は薄れても、このドキドキは、8歳の誕生日と一緒にずっと忘れないような気がします。

ひかる： またバンク 私を試す 熱い国（熱いは作者のママ）

九ヶ月たって思い出すのは、楽しさと混在する極限状態のまだまだ甘い自分です。木村先生、山根先生をはじめみなさんにはお世話になりました。

かつちゃん： 初めての経験が多い旅行だった。インドという広大な地、人の良さそうな人たちは勿論、リクシヤーや湯の止まるホテル、根負けしそうな客引きと人込み。信じられないほどの悪路とポンコツ車。かと思えば雄大なガンガールとラフティング、水浴びする子供達、遺跡、寺院、おいしいマンゴー、色とりどりのサリーやパンジャビドレス。アーグラのバイク三人乗り、タージマハルの真剣な軟派（？）はとても貴重な体験だった。

木村先生の久しぶりの元気な姿と声とかシナータさんの暖かいおもてなしがとてもうれしく旅を感激の多いものにしてくれた。ありがとうございました。是非機会を作っていききたい。

ひろ：

家についた。風呂でジーンズと身体を洗う。どろどろの水が何度でもでる。きれいになっていくとちよっと淋しかった。静かなガンガの夜明け。クラクションとほこりだらけのデリー。あやしげな食べ物と貴重な水。写真をとるとき、群がってくる子供達のキラキラした目。そして、大切な人。感じたことすべて忘れられないでおこうと思った。

とい：

インド旅行は単なる海外旅行ではなくて、とても大きなものを私に与えてくれた。帰国後、二四年間培ってきた主観や価値観によって自分の中にある座標軸のようなものができていたという事に気がついた。その座標軸の存在に気づいただけでも何かゆとりが持てるようになった気がする。うまく言葉に表せないけど、インドという国が何かきっかけを作ってくれたような気がする。そのきっかけを大切に育てていきたい。

カシナータさん、木村先生、山根先生、そしてOTのもんな楽しい思い出をありがとう。

みつえ：

ワイルドで楽しい旅でした。このような旅ができたのもみなさんのおかげです。

木村先生・カシナータさんと山根先生をはじめとするみんなに感謝！

としこ：

この仲間と、たまたま一緒に入学できて、一緒に卒業できて良かったなあと思った。

インド：一人で平気な顔をしてフラフラ歩けるようになったら！

よし：

次は、ヒマラヤ、トレッキングだ。絶対に有休とって、行ってやる！

その時は、木村先生 又、お世話になります。